

## 平安京の物語・物語の平安京——まえがきにかえて——

### 一 中古文学は孤立しているか

『源氏物語』は平安京の物語である。<sup>(1)</sup>

ただ、このように「まえがき」を書き始めるにはわけがある。表現としての『源氏物語』を読むにあたって、「平安京の物語」という視点をもって本書の全体を考えたいと思うからである。この「平安京の物語」という概念は、単に平安京における物語というだけの意味にとどまらない。それは、平安時代の物語について、より空間性を強く意識した概念である。すなわち、「平安京の物語」は、「物語の平安京」と裏表の関係にある。なぜなら物語は平安京を基盤として生成していると同時に、平安京の物語の描き出してみせる世界が、テキストとしての平安京という世界だったからである。

のみならず、これは平安京独特の性格であるが、遷都が行われなくなった時代であったため、天皇が交替するたびに都は更新され、そのまま相同的 homological に都は積み重ね合される。<sup>(2)</sup>さらに、鎌倉期になると、古き平安京を抱え込んで京都というものが成立する。かくて都そのものが重層的な存在となる。そのことは、物語の世界——表現としての物語そのものの重層性である。それでは、平安京の物語のどこに、表現の重層性は、どのように現われているだろうか。

歴史的にみれば、平城京から長岡京、そして平安京へという変遷は、確かにあった。だが、問題は、天皇の居所を中心に形成される都の構造そのものが常に相同的であることである。すなわち、個別の都城の理念や生誕に歴史の変遷があっても、遷都された都が同じ構造をもつことにおいて重層化される。その意味で、平安京の物語は平城京や長岡京を抱え込んでいる（本書、第二章第一節、第二節）。

同時に、都人にとって平安京の都は、社会そのものであり、世界の全体でもあった。そうであれば、物語の平安京とは、物語の舞台と出来事の起きる場所の義である。物語における主人公の成人式と結婚、そして流離や試練といった枠組み scheme が、平安京の都そのものと不即不離のものであったことは分かりやすい。

問題は、物語というテキストというものをどのようにイメージするか、である。そもそも新しいものは、古いものを基礎とすることによって生成するという仕組みがあることは思い描きやすい。そのとき、テキスト——表現の問題として、新しいものが古いものをどのように抱え込むのか、ということが問われるであろう。

ところで、古代文学研究において、平安京の時代と文芸は、今なお「中古」という語を冠して呼ばれることが多い。そのことについて思い出されるのが、いかにも古い文章を引いて恐縮であるが、神田秀夫氏の「平安朝川中島説」である。

神田氏は、江戸時代が「過去より現在に至る文芸の潮流を受け容れて、これを受けとめて濾過する力」があるという。すなわち、江戸時代が『源氏物語』に代表される「文芸の潮流」を「川幅の全面にわたる濾過装置」をもつて受け入れるのに対して、平安朝は、奈良時代からの「文芸の遺産」を「全面的に濾過する装置」をもたず、あたかも「川のまんまに宮廷」があり、「川中島の如きもの」としてある、という。<sup>(3)</sup>「そこにはただ平安京といふ都があつたのだ」という。神田氏は「平安朝が川中島であつたといふ文学史上の事実を最もよく立証するも

の」として説話と歌謡を挙げる（同書、二九四頁）。そして、「そこに官僚貴族ならぬ庶民を母体とした伝承文芸の性格と運命にかかはる根本の問題が潜んでいる」という。神田氏のこの文章は、平安朝と平安朝の文芸が、日本の歴史と文芸史の中で、あたかも孤立しているかのような印象を与えて強烈であった。

だがよく考えてみると、まず神田氏の誤解のひとつは『源氏物語』が平安時代を代表する文芸であるとしても、『源氏物語』がすべてではない、ということである。例えば、何度読んでも、『源氏物語』と『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』との間には、内容において直接的な影響関係が認められないから、後代への影響は部分的、限定的である。

さらなる誤解は、神田氏が「伝承文芸」の担い手を「庶民」に限定されているという点にある。なぜなら、伝承は貴族か庶民かといった身分や階層を貫く性質をもつものだからである（本書、序章）。あえて言えば、目に見える印象だけで、あたかも都だけが閉じられた世界と捉えることに問題がある。つまり、中古の「文芸」は孤立していないはずなのである。

さらに神田氏は、『竹取物語』が『源氏物語』に「先立つこと百年」であり、『信貴山縁起』が『源氏物語』に「後れること百年」であるとして、両者の間には「前後に百年の平安宮廷の文芸の清楚と爛熟とは、格段の差である」のに、「二大傑作」の両者は、「前後に百年の歳月が、存在しなかつたかの如くに、主題の基底に於て同質」であるという（同書、二九五―六頁）。ここにも看過しがたい誤解がある。考えるに、『竹取物語』や『信貴山縁起』という事例が、説かれる話題の例示として「二大傑作」だということが適切かどうかは措くとしても、テキストを支える伝承的な枠組みは歴史的な変容を受けにくく歴史貫通的な属性をもつから、個別に、テキストが成立する時代の生成の場ごとに、基層的な枠組みを用いて構築される、すなわちその都度織り直されるといふことがテキストの生成だと捉えることができる。

## 二 『源氏物語』 分析ともうひとつの企て

さて、『源氏物語』は、これに先行する、とりわけ『竹取物語』や『伊勢物語』などの物語を「撰取」しているということが指摘されてきた。ところで、三卷本『枕草子』第二〇一段を見ると、物語の名が列挙されている事実そのものに、大きな意味のあることが明らかになる。すなわち、

物語は、住吉。宇津保。殿移り。国譲りはにくし。埋木。月待つ女。梅壺の大將。道心すすむる。松が枝。  
こまの 伯野の物語は、古ふる蝙蝠かまぼりさがし出でてもて行きしが、をかしきなり。物もの羨うらやみの中將。宰相に子産ませて、形見の衣などこひたるぞにくき。交野の少將。<sup>(5)</sup>

とある。ここに挙げられた物語の殆どは、私には無学にして聞き慣れないものばかりである。ここに逸書が多いことは何を意味するであろうか。この中で、現在、手にとって読むことのできる物語に何があるかというところ、『源氏物語』にとつての『住吉物語』は古本系のテキスト(古『住吉』)でなければならぬが、それとて古代の本文を明確に「これ」と示すことは困難かもしれない。『宇津保物語』もおおよそ全巻の内容を知ることができるようになったとしても、私が最も不思議に感じるのは、『枕草子』「物語は」章段の中に紫式部が評価する『竹取物語』や『伊勢物語』の名を見出しえないことである。もはや、『竹取物語』や『伊勢物語』の存在は、清少納言との興味とはかけ離れていたことが明白であろう。清少納言と紫式部と関心の違いは、あたかも「流行」と「伝統」、または「古代の現代」と「ひと昔前の古代」といった違いだ、というふうと比較したくなるほどである。紫式部にとって、これは嗜好しこうの問題ではなく、この二書に価値を置くという文学観の違いによるものだというふうに、文芸に対する評価に必然性のあることを予想したくなる。

ただ、これ以上、この比較検討の詳細は措おこう。本書では、紫式部の側に立って、物語撰取の問題をとりわけテキストを支える枠組み scheme の問題として考えてみたい。<sup>(6)</sup>つまり、考察の対象とする『源氏物語』のテキストが、先行するテキストをどのように組み込んでいるか、ということ課題としたい。(本書、第二章第三節、及び第三章)

さらに、歴史(的資料)を対照させる従来の手慣れた方法に比べると、実に唐突で無謀な印象を持たれるかもしれないが、平安京の物語を考えるときに、口承文芸、特に民間説話を支える枠組みを参看し、重ね合わせてみる**ことが、本書におけるもうひとつの企てである。**

というのも、私はこれまで、別途、昔話をひとつのテキストとして分析、解明しようと試みてきたが<sup>(7)</sup>、興味深いことは、戦前・戦後に採録された昔話の中には、その根底に奈良時代の『風土記』にみえる古代からの話柄や話型が下敷きとなっているものがあることである。

平安京の物語を分析しようとするとき、古代の『風土記』にみえる在地の神話を対置させることは有効である。ただ、『風土記』は、原則として漢文体や漢文訓読体で記されているために、構成の次元で抽出することはできないが、残念ながら口承における表現の次元は復元できない。したがって、物語と神話を表現の次元で比較するには、柳田国男氏によって神話を保管するとされてきた昔話(8)を採り上げることは決して意味のないことではない。すなわち、物語の古層に神話を、物語の基層に昔話をもって分析しようとするものである。

そんなことは誰でも知っているわと嘖わられるかもしれないが、もちろん、そんな面倒な事情を、村人である昔話の語り手は、おそらく考えてはいないであろう。ただ、学的にいえば、我々が触れうる昔話は、語り手の意識とは関係なく古代からの枠組みをもとにしており、現代の昔話の語り手が幼いころに聞いた祖父母たちの世代の言葉や習俗は、そのまた祖父母たちの語りを記憶しているから、すなわち少なくとも、江戸時代の言葉や習俗を含んでいることが確認できる。同時に、語り手が教育の中で獲得した近代語(あるいは現代語)も含まれている。

そのように考えると、昔話それ自体もまた歴史性を帯びながら重層的に構築されているテキストだといえる。つまり、物語や説話など文字言語によって織られた、古典と呼ばれるテキストは、歴史性を帯びつつ古層や基層から新層や表層へと、重層的に構築されているテキストだといえる。と同様、昔話も音声言語によって織られた口承文芸のテキストとして重層的に構築されている、ということが出来る。そのことにおいて、文献文芸と口承文芸とは相同的である。

とはいえ、だからといって『源氏物語』を直接口承文芸と結び付けて批評することは、あまりにも強引にすぎ、かえって考察の深みにまで至り得ないであろう。それではどのようにすればよいか。今はまず、構成すなわち枠組みの次元で比較を試みることにしたい。

一方、文献の側で比較できるテキストとして、『竹取物語』や『伊勢物語』は『源氏物語』絵合巻や虫巻、蓬生巻などにおいて取り挙げられており、紫式部の愛読書だったことが分かる。『源氏物語』の作者は、多くの物語の中から、この二書におそらく共感共鳴することがあり、自らのめざす物語と同じ匂いを嗅ぎ取っていたにちがいない(本書、結章)。それはもしかすると、のちにも述べるように、『伊勢物語』にも『竹取物語』にも、『源氏物語』と共有する人間認識―他者の発見という醒めた眼をもつかどうかのポイントになっているのではないか、その点で両者は『源氏物語』にとつて先駆的な存在である。つまり、三書の関係を従来のように伝奇性や虚構性とかという議論に求めることは少しばかり筋違いにみえる。そのような主題的な同質性は、やはりまず構成における同質性において可能となるのではないか。だから、構成という点からみると、『源氏物語』が『伊勢物語』や『竹取物語』などと物語の枠組みを共有しつつテキストを構築しているというふうに考えることができるだろう。つまり、神話や昔話の側からの考察と、先行する文献としての物語の側からの考察とを併せることによって始めて、『源氏物語』とはどのようなテキストかが明らかになるであろう。

### 三 口承文芸との関係の中で文献文芸が生成すること

ちなみに、実態的にみれば、口承文芸は文献文芸の基盤とみえるが、現代の眼からすると、かつて存在した口承文芸の働きが見えにくくだけである。口承文芸と文献文芸とは、とりわけ古代から中世に至るまで(9)は、まぢががなく、いつも絶えざる緊張を保ちながら併存していたと考えられる。そのことは外部の口承文芸を意識して文献文芸が成立したというだけではない。文献文芸の内部に口承文芸はいかに抱え込まれているかという問いでもある。

そう考えると、平安京の物語のテキストはどう読めるのか。そのとき、文献文芸は口承文芸と枠組みを共有する。あるいは、文献文芸は口承文芸の枠組みを基層として構築されている、と考えることができる(10)。ただ、後代に残るのは文献だけであるから、かつては文献だけが存在したかのように絶対化されてしまふといえる。

ところで、また古い文章を持ち出して恐縮であるが、かつて益田勝実氏は「無意識と慣習に潜むもの―微視の人間史学序説―」という文章を書いている。そこで益田氏は、「わたし」の中に「内在する歴史」を発見し、「人体に潜むふしぎ、短い生涯を生きてこの体に悠久のおもかげのあること」を指摘し、柳田国男氏の学問を検討した上で、「自然と文化の頑固なまでの残留、その累層していく構造」というものに関心を寄せている。そして「日本の近代」における「自我の時代」を批判し、「前代からの歴史の引きつづきと見える現実の闇部分」をどう捉えるか、と問題提起する。そして「自己学としての民俗学の再評価」の可能性を探り、「自己の内部の歴史性をふくめて全体的把握、自己の伝承している習俗といま人びとが意識して創出しつつあるものの相関関係を、ネグレクトしない根本の立場を、自分の学問の出発点」としたいと表明している(11)。これは何度読み直しても、なお興味深いものがある。